無常の終焉

奥田亡羊

東日本大震災から二年が過ぎた。今年三月、現代歌人協会が『東日本大震災歌集』を出版した。現代歌人協会員の四百八十三人から寄せられた歌が災害の傷痕を生々しく伝えている。それを読みながら考えさせられたことがある。命のはかなさや世の中の無常を詠んだ歌がほとんどないのだ。

震災以後、鴨長明の『方丈記』が語られるのをたびたび目にしたが、その根幹にある無常観と震災とを結びつけて論じる人には一人も出会わなかった。人命尊重や被災者救済を優先するヒューマニズムが浸透した現代社会では、諦観につながる無常観は受け入れ難いものなのかもしれない。

それにしてもマスメディアが無常観をタブーのように扱い、中世以来の無常観の伝統を継ぐはずの（？）僧侶や歌人たちからもほとんど無常という言葉が聞かれないというのは、やはり注目すべきことであるように思われる。

原発事故も無関係ではないのかもしれない。一般的には無常観は「国敗れて山河あり」といった自然の永遠性があってはじめて救いに転じられるものだ。ところが原発事故による放射能汚染によって自然そのものが決定的なダメージを受けてしまった。有史以来はじめて「国敗れて山河なし」の事態を迎え、無常観もまた無意味化してしまったのではないか。

先に『東日本大震災歌集』で無常観を詠んだ歌がほとんどないと書いたが、じつは次のような歌がある。

・ひととせを経て梅の木に白き花咲けばあの日のなかりしごとし

三井　修

これが阪神大震災のときに詠まれたものであったならば、読者はこの歌から無常観を受け取ったかもしれない。しかし、原発事故を起こしてしまった今日、この歌は、目には見えずとも「あの日」を境にまったく違う時間を生きている現実を詠んだ歌と受け取るよりほかにない。無常観が機能しなくなった現実を如実に物語る一首であるように思う。

これは無常観で捉えられる時間のスケールを放射能汚染がはるかに超えてしまったという問題でもある。では今後、無常観に代わる何を、どのようにうたうことができるのか。そのヒントになる一冊が高野公彦の『青き湖心　般若心経歌篇』であった。

この歌集は般若心経の一文字ずつを歌の頭に置いた題詠による作品集で、平成六年に刊行された本阿弥書店の『高野公彦作品集』に収められていたものを独立歌集として出版したものだ。震災とは無関係に編まれたものであるが、たとえば次の歌など無常観の問題を考えるにあたって重要な意味を持つ。

・尽未来（じんみらい）　この世寂しゑ　尽未来　尽未来際（じんみらいさい）　をみな恋しゑ

「尽未来」「尽未来際」、いずれも未来永劫の時をあらわす仏教語だ。個を超えた命として〈われ〉の存在が捉え直され、業の悲しみとも祈りとも分かち難い感情が湛えられている。

東日本大震災以後、歌壇では宗教性が濃厚な作品が多く生み出されているように感じるが、震災が本質的に短歌に問うているのは時間のスケールの問題であるように思う。